

幕別スポーツ史

まくべつスポーツ史

町体育連盟前

幕別町体育連盟設立以前の本町スポーツ活動の資料は、町史（70年史）以外に乏しく、各資料をもとに、断片的であるがまとめてみた。

1. 開拓から明治期

幕別町に開拓の一畝が打ち込まれたのが、明治15年。開拓当時は、農耕牧畜中心の生活労働のため、毎日毎日が開墾の仕事と生活に追われ、スポーツなど考える余裕もなかったであろう。その後明治33年頃、各地に神社が建立され、春秋の祭典の折に奉納相撲が行われた。これが、本町のスポーツ活動の始まりと考えられる。

スポーツ活動の中心は、青年たちであるが、本町に青年会が組織されたのは、明治40年頃である。その青年会活動の中心に、柔道・剣道・銃剣術などスポーツがあったと考えられる。次第に組織も強化拡大され、本町スポーツ活動発展の中核となって行った。

2. 大正期

本町において、本格的に組織運動競技が興ったのは大正時代に入ってからと思われる。十勝連合武術大会に負うところが大きい。十勝連合武術大会が初めて開催されたのは、大正5年6月、帯広市（当時は帯広町）に幕別町をはじめ管内から2,850名が参加し、盛大に開かれた。特に「白人・帯広間マラソン」が記録に残っている（芽室体育史）。

また、小学校に赴任した師範学校出身の教師達によって、野球・庭球・スキーなどが持ち込まれ、普及されたことは特筆すべきことである。

3. 各競技種目の発展（町史より）

野球 大正6年3月28日、札幌師範学校を卒業した新田達道は、訓導として幕別尋常高等



小学校に赴任、翌7年3月28日に訓導として着任したさっぽろ師範出身の石井武男とともに、当時の教育界に新風をふきこんだ。

新田は赴任と同時に、当時としては珍しい野球・庭球・柔道・陸上・スキーを持ちこみ、石井は剣道・書道・ソロバンを児童生徒に教えた。新田が教えた野球チームは、他チームと試合を行うまでに成長し、帯広・池田・茂岩に遠征、かがやかしい戦績をあげた。幕別の野球のはじまりである。

新田はのち身体検査に欠くことのできない座高計、虚弱児の体質改善に役立つカーボン式太陽灯を発明、各学校で広く利用された。

昭和3年、当時止若市街で雑穀屋をしていた長尾昇が、新田工場と統内治水から選手を選抜し、止若野球倶楽部を結成した。以後、石黒某・白坂久治・榎本孝雄・加藤登によって監督がリレーされ、昭和17年の全国大会に十勝を代表して札幌円山球場に駒をすすめた。戦績は中村勲・西尾弘のバッテリーで準決勝に進み、この大会で優勝した苫小牧王子と熱戦を展開、2A-1で惜敗した。

新田ベニヤの職員で組織していたチームも優秀な戦績をあげたが、全道の野球界から「新田チーム強し」と知られるようになったのは、津川康郎が監督になってからである。

昭和21年、復活第1回オール十勝軟式野球選手権大会（帯広市営球場開場記念）に出場した新田チームは、決勝戦で帯広木材倶楽部を2A-1で破って選手権を獲得し、翌22年の第2回国民体育大会北海道予選に十勝を代表して出場、中村勲・金谷良のバッテリーで全戦、決勝戦で室蘭代表の日鋼と戦い惜敗した。しかし小樽代表に13A-5、空知代表を2A-1、札幌代表に5-0で勝ち、全道に「新田ベニヤ強し」を印象づけた。

戦後止若倶楽部は佐古敏雄によって再建された。だが、物資不足時代にクラブを運営することは並たいていの苦労ではなく、揃いのユニホームを作るため、農協倉庫のはきだめをもらいうけて豆よりし、この豆を佐古が大阪まで運んで売却、その金で落下傘の布地を購入、ユニホームを作るといふ涙ぐましい努力もあった。この止若倶楽部は、のち新田チームと合併して「ニュースター」を改称、各種の大会で活躍した。解散したのは26年秋である。

現在、町内の野球人口は多く、チームとしては、役場・農協・新田などが、それぞれ単独チームを結成しているが、かつてのような大型チームはない。

なお、柏葉高等学校野球部の甲子園進出の原動力となり、のち法政大学・拓殖銀行野球部に入った品田栄太郎、主戦投手として国体に3回出場した帯広営林局野球部の本庄博美も本町出身者である。

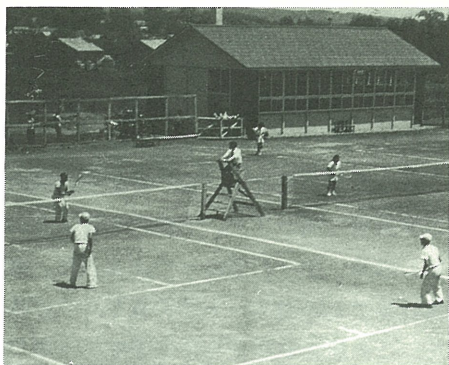
卓球 昭和3年、幕別小学校の教員、大橋信二・藤田平治、それに笹原登らによって卓球が普及し、町内から多くの選手があらわれた。



昭和12年、帯広市で開かれた全十勝卓球大会に大橋信二らのメンバーで団体優勝、個人では笹原登が優勝した。このほか昭和22年度全北海道軟式・硬式卓球選手権大会で両方の選手権を獲得した長谷川清隆、同年全日本高等学校卓球選手権大会で優勝した若月寿治、帯広庁立女学校時代からのプレーヤーとして名をうった秋山サチ子も本町出身者である。

昭和23年、幕別卓球協会が結成され、主将に長谷川清隆、副主将に若月寿治、選手に中川武夫・会田昭三・藤平景夫・国安宏昌・富西定美・今本和三らを配して活躍、幕別町卓球クラブ結成の下地をかたちづかった。幕別町卓球クラブは26年5月に結成され、会長に一宮龍熊、副会長に高島米蔵・笹原登が就任した。このほか、新田チームの活躍もみのがせない。主な選手は土居徳朗・森田宣雄・小島善一・堀切武夫・竹下徳三らである。

庭球 止若在住の同好者によって止若庭球協会を組織したのは昭和25年6月。会長に半井



勇三、副会長に笹原登・篠原正男が就任、各種の大会に選手を送った。協会を組織する前の24年から26年の3年間にわたり、半井勇三・中村実・篠田正雄・笹原登・芝木繁・藤島実・品田信・竹内幸男・鳥海八郎・白川醇らによって、連続して十勝町村大会の優勝をさらった。特に竹内幸男は全道硬式選手権利を獲得、全道の庭球界から注目された。

また、中村実・藤島実・北原隆・牛尾毅・芝木繁・芝木勝幸・石橋次雄らによって昭和29年から31年までの4年間、十勝町村大会で連続優勝したほか、芝木勝幸が33年に全道で優勝、芝木祐之が37年から39年まで連続国体に出場し39年には全日本学生選手権と東日本学生選手権でいずれも3位、40年には東日本学生選手権で優勝している。なお、十勝大会で優勝した選手では齊川進・牛尾昌平・横山諄一らがいる。

相撲 北海道に入殖した当時、これという娯楽もなかっただけに、なにかがあると相撲大会が開かれた。大正から昭和のはじめにかけて、



東京で相撲をとった経験のある堀田毅（いまの道議）らによって素人の相撲協会が結成された。この相撲協会では番付を編成して全道を股にかけて旅を重ねた。この番付で森脇忠吉が「岩ヶ淵」の四股名で大関を張っていた。森脇の全盛期は昭和4年から5年にかけてである。その頃、青年素人相撲で名をうった選手では館喜雄・白戸重蔵・榊原利一、それに途別の佐々木・札内の木村吉市らで、

以後、これといった選手はいない。昭和の20年代にはいって沢田留吉・森脇仁、最近では館昌利・武藤利貞・山田一徳・佐々木房雄らが十勝大会で再三にわたって団体優勝している。

特に館昌利は38年から40年までの三カ年間、連続個人優勝の偉業をなした。

バレーボール 幕別のバレーボールは、新田ベニヤではじまり新田ベニヤで終わったといっ



ても過言ではない。昭和21年、新田ベニヤ工場の愛好者によってチームが結成された、主な選手は山崎長一・北原信治・平塚治郎・昇の兄弟、根田辰雄・丸山啓三・袴塚一俊・鳥海八郎・本庄学らである。

新田チームは、澱粉袋を改造して作ったユニホームを着用して活躍、新田チーム黄金時代を基いた。当時、十勝のバレーボール界のAクラスは新田ベニヤ・帯広郵便局・日本通運・鉄道工機部・教員団の5チーム。なかでも新田チームの活躍は目ざましく、22年、23年の2年間、連続し

て十勝選手権を獲得、全道選手権たいかいに駒を進めた。

昭和24年、5年頃、全国的に不景気の嵐が吹きすさび、新田ベニヤでも希望退職者を募って、これを切り抜けた。この希望退職者の中にバレーボールの選手も含まれたためにバレーチームは小型化し、自然消滅の形となった。

陸上競技 大正5年6月15日、十勝軍人会・青年会共催の第1回「全十勝連合武術大会」



が帯広競馬場で開かれた。十勝の体育大会のはじまりで、以来、年中行事の一つとなった。種目も回を重ねることに増え、十勝の青年たちの血をわかさせた。この連合武術大会は十勝管内各町村にスポーツ・ブームをもたらし、幕別からも毎年多くの選手が参加、また村をあげて、これを応援した。

大正12年および13年の2カ年間、高橋富治が全道大会に出場した。種目は5,000m。また14年には橋本勝が岩見沢で開かれた全道大会の400mの部に、15年には6月の幕別体育大会で1,500mに優勝した服部間一が、その余勢をかって7月20日の十勝連合武術大会で800mに優勝、8月15日に小樽市で開かれた全道大会に出場した。大正15年の連合武術大会に出場した選手は次の通りである。

▷200m＝藤川久吉(途別) ▷400m＝西尾嘉男(白人) ▷800m＝服部間一(新和) ▷800mリレー＝副家稔、副家定雄(以上新和) 藤川久吉、清野清司 ▷1,500m＝高橋邦雄(止若) ▷5,000m＝高橋富治(止若) ▷15,000m＝坂口勇(咄別) ▷1,600mリレー＝西尾嘉男・佐藤軍治・佐藤栄治(以上白人) 橋本勝(糠内) ▷走高跳＝副家定雄 ▷砲丸投、円板投、槍投＝福家清一。

このほか100m・走幅跳に出場を予定していた山田栄(糠内)は、柔道の部に出場のため清野清司(白人)とかわり、柔道一本にしぼった山田は、みごと優勝している。

昭和に入り、スポーツ人口はますます増加、各種大会で幕別青年の名をかためた。昭和2年、坂口勇・花井豊が全道大会の1万mに出場している。昭和5年6月22日、十勝連合武術大会の最中に止若市街で大火が発生した。十勝毎日新聞は、この模様を「場内放送で止若市街の火災が報じられるや、会場は一瞬、大混乱をきたし止若の住民はあらずってハイヤーにとびのり帰村の途についた」と述べている。この大火が原因ではないが、翌6年の大会は中止された。

戦争の激化とともに、陸上競技は軍事教練の中の一つ目となり、大東亜戦争の突入によって休止の状態となった。我国の陸上は、昭和15、6年で事実上の終幕をつけている。この時代のスプリンターとしては米森喜代松・佐々木定雄・山本啓三・小野寺誠・大沢豊・板垣恭二らの名があげられ、各種の大会で好成績をあげた。特に教員の板垣はオリンピック候補となり、神宮大会で3位に入賞、惜しくも選に洩れたが、好スプリンターとして広く知られた。前記の米森・佐々木・山本・小野寺・大沢の好記録は、板垣の良き指導の賜である。戦後、板垣はコーチとして選手の育成にあった。

これらスプリンターは、大東亜戦争突入によって続々と応召、この結果、陸上競技は中絶

の状態となった。戦後の陸上は全幕別青年団体育大会で復活、全十勝大会に選手を送ったのは昭和24年からである。

昭和26年7月、川西農業高等学校グラウンドで開かれた第6回全十勝青年団陸上体育大会で松浦和夫が100mを12秒フラットで優勝、翌27年には11秒5の大会新記録で優勝した。26年には鈴木洋子が100mを14秒2で優勝、鈴木は走幅跳でも優勝している。

このほか、村田進・橋原加代子・宮本春樹・松田巧・梶田勲・堀内喜典・山崎愛子らも幕別代表として活躍した。27年の大会では、800mリレーに松浦和夫・野越敬正・武田充・橋本常久が出場、1分44秒3で優勝した。

戦後の一時的な社会混乱も、次第に安定するとともに、スポーツ人口も急激に増え、また多くの選手が十勝大会・全道大会に出場、郷土幕別のために万丈の気を吐いた。しかしスポーツ人口増加の割に、特に頭角をぬきこんでた選手は見当たらない。

なお、町および町教育委員会、町体育連盟などが主催して開かれた町民運動会は昭和27年がはじめて、以後町民の健康増進およびスポーツを通して町民相互の親睦を図ることを目的に開催されている。

スキー 幕別のスキーは、大正のはじめ福家兄弟（稔・定雄・英夫）によってはじめられた。



大正3年の冬、時の道議会議員・菅野光民は、スキーで広尾から帯広に抜けた。菅野は広尾から忠類に出て、忠類から駒島・糠内・止若を経て帯広に向かったが、糠内道路で菅野のスキー姿をみた福家兄弟は積雪の中でも埋まらず、しかも軽快に滑る姿におどろいた。福家兄弟がスキーを見た最初である。福家兄弟は、スキーの型に似た牛舎の板をはぎとり、父親の英一に叱られたのは、菅

野のスキー姿を見てからのことで、のちヤチダモの木でスキーをつくり、スキー・スケートの本で滑り方を独学した。

大正の終わりに上美生で初のスキー大会が開かれ、福家兄弟をはじめ幕別から多数の選手が参加して各種目の上位を独占した。その当時、福家兄弟のほか新田達道の教え子たちで、幕別は十勝でも最もスキーの活発なところといわれ、西猿別の山で、数度にわたってスキー大会が開かれた、その都度、山田毅夫が世話人として走りまわった。当時活躍したのは福家兄弟・長崎幸一・亀井正雄・館喜雄らで、特に福家定雄は、現在の国体予選、当時の神宮予選に3回出場、入賞こそしなかったが、好記録をおさめた。

大正13年、中稲志別の内藤宗一は関口道司にスキーの手ほどきをうけた。内藤は当時17歳。陣野原五郎らと陣の原所有の白馬ヶ丘でスキーを楽しんだ。札内地区スキーのはじまりである。その後、内藤宗一・陣野原五郎・西尾慶重・清野茂・小田善一・西尾正造・渋谷五郎・種村弥重作・吉田一二三・植田某らと札内スキー倶楽部をつくり白馬ヶ丘でスキー大会を開いた。

このスキー倶楽部からは西尾弘など西尾兄弟、国体に出場した梅田音市、高校スキー駅伝

に出場し2位に入賞した内藤宗春・同泰治・同琢雄・生出忠雄・西尾勝らを出し、十勝のスキー界から注目された。

スケート スケートが幕別に普及されたのは比較的遅く、昭和にはいって僅かの愛好者が



下駄ばきスケートで楽しんだ。のち、靴にしぼりつけるスケートによって沼や川それに踏み片目られた路上で滑った。現在のように盛んになったのは国体スケート大会が帯広で開かれてからである。幕別を代表する選手となると、日中対抗競技会の日本代表に選ばれた武田美佐江が、まず筆頭である。

武田は相川の生れ、中学校の全十勝大会で頭角をあらわし、大谷高等学校時代では荒けずりだが力のある選手として将来を嘱望された。武田は37年2月、第10回日本二部選手権大会で総合優勝して一部に昇格、高校卒業後、長野県三協精機株式会社に入社した。40年2月、全日本選手権で総合2位、この年の12月、日中対抗競技選考会で総合3位で代表権を獲得、中国本土に渡った。次期オリンピック候補に選ばれたのは41年2月である。

武田に続く者として中条静子がいる。38年、39年の全十勝中学校選手権大会で優勝、大谷高校に進学して全国高校大会1,000mで優勝、また41年1月の国体で500m3位、1,000mには優勝、全日本二部選手権大会で総合優勝して一部に昇格した。今後の活躍が期待されている。

なお、武田・中条を激励する集いが、41年3月18日に町体育連盟主催で開かれた。

町体育連盟設立

昭和30年、町内の各種スポーツクラブ・協会を統合、幕別町体育連盟が結成され、初代会長に一宮龍熊が就任した。この体育連盟は、各単位クラブが会費を持ちより運営したため、ほどなく財政不振となり、連盟の活動も低下、自然消滅の形となった。昭和33年に再建の話が持ち上がり、資金の面を町で補助することで再建、会長に（故）石田勝市が就任、のち（故）加藤光也、木村正夫と引き継がれ現在にいたっている。

新しい連盟の組織は、正副会長のもとに正副理事長を置き、理事長のもとに各種目ごとの常任理事・理事を配置して活動している。